

資料館だより

第 45 号

平成18年(2006)

9月30日

編集・発行 市立歴史民俗資料館 〒208-0004 東京都武蔵村山市本町5-21-1 TEL 042(560)6620
ホームページアドレス <http://www.city.musashimurayama.tokyo.jp/shiryoukan.html>



むさしむらやま妖怪マップ

「妖怪」については柳田国男氏の『妖怪談義』などによって研究の端が開かれ、その後も多くの研究者によって更なる分析がなされています。常光徹氏によれば「妖怪は、異様な姿と不思議な力をもった超自然的な存在で、不安や恐怖をかりたて、時には災いを引き起こす^{いふ}畏怖の対象」で「不可解なできごとや不思議な現象を妖怪とよぶこともあり、妖怪のイメージは実に多様である」と述べています。妖怪は、かつての信仰対象^{れいらく}が零落し

た姿でもあり、理解を超えた出来事を体験した際の説明体系であったりなど、そこには様々な側面があります。

武蔵村山市にも色々な妖怪の話が伝わっています。上の地図は『武蔵村山の昔がたり-村山ことばによる口頭伝承-』に見られる妖怪の一部を書き入れたものです。そこにはダイダラボッチ(市内ではデエダラボッチの名で伝わる)という巨人の痕跡も見られます。

デエダラボッチの井戸伝説

武蔵村山市立歴史民俗資料館学芸員
青木 哲

ダイダラボッチについて

日本各地には、巨人伝説が多く残っています。古くは『播磨風土記』や『常陸風土記』に巨人の話が見えます。ここでは『播磨風土記』から巨人伝説を抜粋してみましょう。

「昔大人ありて常にかがまりて行きたりき。南の海より北の海に到り、東より巡り行きし時にこの土に来到りていえらく、他の土は卑くして常にまがり伏して行きたけれども、この土は高くあれば伸びて行く。高きかもといえり。かれ託賀の郡とはいうなり。その躰みし跡処、数多、沼となれり」

この話の最後には、巨人（文中での名は大人）が歩いた跡がたくさん沼になったと記されています。各地に残る巨人伝説は、上記のように「現在ある地形は巨人によって作られたもの」と語るものが多く、例えば富士山も巨人にまつわる話があり、要約すると次のような内容です。

「昔ダイダラボッチが富士山を背負って相模野に来て一休みした。立ち上がろうとすると、富士山は持ち上がらなくなり、背負っていた縄も切れてしまった。そのとき立ち上がろうと踏ん張った跡が現在の鹿沼と菖蒲沼で、悔しがって地団駄を踏んだことから、別名じんだら沼とも呼ばれる。」

このような巨人による地形創造譚は、秋田県の猪苗代湖に浮かぶ二子島や、滋賀県の琵琶湖、長崎県の湯島など日本各地に見られるものです。そもそも自然界創造の偉大な神への信仰が衰退し、力持ちの巨人や鬼の姿で、地形の由来を説く伝説になっていったものだろうと考えられます。

各地で巨人は、ダイダラボッチあるいはダイダラボウ・デエダラボッチ・ダイダボウシ・デーランボウ・デンデンボメなど様々な名称で伝わっています。中でも広く浸透している名はダイダラボッチ・ダイダラボウで、漢字では大太羅法師・大多羅法師などの字があてられたりします。「ダイダラ」という名については、大太郎と書くものであり、これは大きい人を意味しているものではないかという説があります。

また「タタラ」という言葉の転化であるなどともいわれています。巨人の足跡が沼や池になって残っているという話は、踏ん張った跡とする内容のほか、悔しがって地団駄を踏んだ跡とするものもあります。巨人が地団駄を踏んで大地を踏みしめたという動作と、鍛冶師がタタラを踏む動作の近似性から来た名前とする説です。ですがこれは、どちらかに決め付ける問題ではありません。なぜなら、このような伝承というものには、一つの決まった解答が導き出せるということはなく、様々な要素が複合的に入り組んで、伝承を形づくっているものである故なのです。

デエダラボッチの井戸

武蔵村山市でもデエダラボッチという名の、巨人伝説が残っています。『武蔵村山の昔がたり－むらやま言葉による口頭伝承－』に収録された「デエダラボッチの井戸」という話を次に紹介します。

デエダラボッチはデッケエ男でよう。頭が雲中へ入って見えねえ位なアだアと。

ある日、デエダラボッチは、ドケエラから蔓ウ持ってきてよう。ソンドもって浄土山を背負って、踏ん張った足跡が、神明ヶ谷戸にアンデエダラボッチの井戸になったアだアと。

背負った浄土山は、途中で藤の蔓がヒッチギレちゃって、坂本まで来たアトコデ、ドサッとソケへおっこっちゃった。ソン時、切れた藤ッ蔓を向山にホッポリ投げちまったんで、浄土山にゃあ藤がなくって、向山にゃあイラ生えてンだアとよう。

ここのデエダラボッチの井戸は、いくら日照りでも水が絶えなくってよう。芋窪の者も「水ウくれ」ツツッテ来たアね。

デエダラボッチの井戸は、他にもあってよう。赤堀じゃあ、「ビイシャラ井戸」ッてゆってンなあ。ビイシャラ、ビイシャラッて水が流れてンから、そうゆうふう呼バッテンだんべえ。

やはりここでも、地形創造が語られています。が、題名にもある「井戸」は武蔵村山市内にいくつか確認されています。

そもそもダイダラボッチ伝説では、その足跡が沼や井戸、池や湖になったと解説されることが多く、これらの跡地はいずれも、水との関係が深いという共通点が見出されます。

そして市内に「デエダラボッチの井戸」とし

て伝承されている場所を地図上に示すと、ほぼ一直線に結ぶことができ、まさしく巨人デエダラボッチの歩いた跡のようだといいます。柳田国男氏は「ダイダラ坊の足跡」という論で、

「わが武蔵野のごときは、かねて逃水・堀兼井の言い伝えもあったごとく、最も混乱した地層と奔放自在なる地下水の流れをもっていた。泉の所在はたびたびの地変のためにいろいろと移り動いた。郊外の村里にはかつて清水があるによって神を祭り居を構え、それがまた消えた跡もあれば、別に新たに現われた例も多い。かくのごとき奇瑞（神聖なものの前兆として現れる不思議な現象）が突如として起こるごとに、あるいはかのダイダラ坊様の所業であろうかと解した人の多かったことは、数千年の経験に生きた農夫として、いささかも軽率浅慮の推理ではなかった」（ ）内は引用者による

と述べていますが、武蔵村山市のそれも地下水脈との関係を示唆する声があります。では、市内の「デエダラボッチの井戸」にはどのようなものがあるのでしょうか。

まず、「むさしむらやま歴史散策コース案内」に紹介されている中央五丁目25番地のものがあります。



大多羅法師の井戸（東コース⑤）

ここは「でびいしゃら井戸」とも呼ばれ、日照りが続くような時でも潤れたことのない湧水で、かつては飲料にも使用されていたといえます。ただし水が湧いていたのは第二次世界大戦前の頃までだったようです。この井戸は「むさしむらやまガイドマップ」にも掲載されているので、一番馴染み深いものなのではないでしょうか。

この他にも中央四丁目1番地にある日吉神社の、境内東側道路添いで現在、防火用水となっているものが「デエダラボッチの井戸」であると伝わっています。

『武蔵村山市史』によると、現在はなくなってしまったそうですが、岸地区にある須賀神社の南側に「デエダラボッチのアシッコ」があったという記載があります。しかし関連資料がほとんど見つからず詳細は不明です。

また市内には、赤坂池などの溜め池が現在も姿を残していますが、ここにも「デエダラボッチの井戸」との繋がりが見られます。

溜め池とは農業用水を溜めるための人工的な池で、台地や丘陵の谷で流れを堰きとめて作ったり、平地で四方を囲って貯水して作るものですが、先述の「歴史散策コース」に紹介されている井戸は、「御嶽の溜井」と呼ばれた溜め池の元となる湧水の一つです。

市内に伝わる江戸時代の村絵図（村の状況を平面的に描いた図。江戸時代に入ってから、村の行政上の必要などから造られるようになった）の中から、旧中藤村の村絵図を見てみると、「蟹ヶ沢溜井」という名の溜め池がありますが、この元となる湧水も「デエダラボッチの井戸」だったそうです。

他に個人宅の井戸でも「デエダラボッチの井戸」として伝わっているものもあります。その中には、かつて共同井戸として利用された他、街道に行く人たちの休憩所も兼ねていたと伝えられるものもあります。まだこの他にも「デエダラボッチの井戸」として伝わる箇所や、かつて伝承はあったものの周囲に忘れ去られてしまったものがあるかもしれません。

むすびに

このように、武蔵村山市にはデエダラボッチという巨人にまつわる伝承が散見されます。それらはいずれも井戸（湧水）に何らかの関係を見出すことができ、際限なく湧き上がる清水という光景に、自然界の脅威を認め、大地の奥深くより水を地表へと現出させるに相応しい巨人の姿を想像したものでしょう。

<主な参考文献>

岩井宏實『暮しの中の妖怪たち』（河出書房新社 1990）

国立歴史民俗博物館『異界万華鏡－あの世・妖怪・占い－』（国立歴史民俗博物館 2001）

武蔵村山市史編さん委員会『武蔵村山市史 民俗編』（武蔵村山市 2000）

柳田国男『定本柳田國男集 第五巻』（筑摩書房 1962）

寄贈資料（平成17年度）

	寄贈者 (敬称略.五十音順)	寄贈資料名	数量		寄贈者 (敬称略.五十音順)	寄贈資料名	数量
1	荒畑勝実	近世文書	全14点	8	野崎富生	近世文書・メンコほか	全381点
2	石川伊三郎	モモヒキ・半纏ほか	全7点	9	波多野仁美	板碑・近世文書ほか	全36点
3	久保田玉乃	ヒキヒロイほか	全3点	10	比留間勇	雛人形ほか	全6点
4	小林栄一	謄写版・ヤスリ板	各1点	11	比留間武久	小町アイロン	全1点
5	須田義則	凧・灯籠絵ほか	全82点	12	増尾藤夫	竿秤・分銅	各1点
6	並木基一	コオサ・アヤほか	全172点	13	渡辺善一郎	竹釘ほか	全4点
7	西組(神明ヶ谷戸)	共有膳椀	全130点	14	渡辺武男	打製石斧ほか	全3点

資料館利用状況（平成17年度）

	開館日数 (日)	利用者数 (人)	市内		市外	
			人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)
4月	28	1,732	700	40.4	1,032	59.6
		1,621	641	39.5	980	60.5
5月	29	1,646	639	38.8	1,007	61.2
		1,612	621	38.5	991	61.5
6月	25	1,015	297	29.3	718	70.7
		827	250	30.2	577	69.8
7月	29	1,328	514	38.7	814	61.3
		1,289	475	36.9	814	63.1
8月	29	1,240	526	42.4	714	57.6
		1,240	526	42.4	714	57.6
9月	28	1,307	333	25.5	974	74.5
		1,128	323	28.6	805	71.4
10月	29	3,249	727	22.4	2,522	77.6
		3,213	696	21.7	2,517	78.3
11月	28	1,938	615	31.7	1,323	68.3
		1,441	372	25.8	1,069	74.2
12月	25	980	340	34.7	640	65.3
		747	256	34.3	491	65.7
1月	27	827	293	35.4	534	64.6
		808	293	36.3	515	63.7
2月	26	1,127	497	44.1	630	55.9
		822	314	38.2	508	61.8
3月	29	1,658	565	34.1	1,093	65.9
		1,438	434	30.2	1,004	69.8
合計	332	18,047	6,046	33.5	12,001	66.5
		16,186	5,201	32.1	10,985	67.9

※ 利用者（入館者）には団体を含み、下段はそれを除いた数字

- ◆ 今回の表紙に使用した「むさしむらやま妖怪マップ」は平成15年時の資料館職員作成物です。
- ◆ 地図内に使用している妖怪図は、以下よりの引用物になります。
 - 『画図百鬼夜行』鳥山石燕 安永五年
 - 『北越奇談』橘崑崙 文化九年
 - 『絵本和漢誉』葛飾北斎 天保七年
 - 『玉山画譜』江戸時代
 - 「河童痛風薬」の包紙